

企画展 かお・すがた・こころ—肖像と近代—

小倉遊亀《舞妓》1969年 京都国立近代美術館蔵
—企画展「かお・すがた・こころ—肖像と近代—より—

■ 雪舟の《花鳥図屏風》と加賀藩の美術工芸

【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 加賀藩における狩野派の絵師たち【古美術】

■ 工芸と暮らす【近現代工芸】

■ いしかわゆかりの肖像【近現代絵画・彫刻】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 土曜講座について
- 〔新コーナー〕学芸室の人々
- 5月の行事予定
- 今年度の目玉

企画展(第7~9展示室)

かお・すがた・こころ—肖像と近代—

主催/石川県立美術館

後援/北國新聞社、NHK金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送

出品協力/東京国立近代美術館

4月18日(日)~5月23日(日) 会期中無休

◆観覧料

	一般	団体/友の会
大人	1,000円	800円
大学生	800円	600円
高校生以下	無料	

※団体は20名以上。65歳以上は団体料金。

学芸員の眼

本文の結びにも述べましたが、思いがけなく傑作と出会える展覧会です。入場料がお手頃だから、思っているとびっくりするでしょう。よくこれだけの肖像作品が集まったなど主催者ながら感心します。東京国立近代美術館をはじめ、世田谷美術館、東京藝術大学、京都国立近代美術館、京都市美術館など全国18の美術館から、選りすぐりの46点。そして当館の48点の名品で近代の諸相を展観します。本文に記せなかつた作家でも、川端龍子や高山辰雄、中川一政に山田鬼斎ら近代を代表する作家がずらり。美術はその時代を映す鏡です。同じ鏡なら曇りも歪みもない鏡で、如実に映し出したいもの。どうぞこの機会をお見逃しなくお運び下さい。

今回は各章作品の見どころをご紹介します。

第I章「芸術を極める」では、まず本展メインビジュアルの安田靉彦《大観先生像》です。横山大観の肖像は、多くの画家が手がけましたが、それは激動の近代美術を切り拓いた先駆者の威容が、人を惹きつけたからでしょう。本作は2年間で8回催された、「二十五日会」なる横山大観を写生する会の成果が結実したものです。その他樋口一葉を描いた鏗木清方《一葉》、平柳田中による木像《鶴鬢試作(岡倉天心像)》他、傑作が目白押しです。

第II章「歴史に求める人の姿」では、狩野芳崖、橋本雅邦ら近代日本画の先駆者から荻原守衛、高村光雲らの彫刻の名品までご覧いただきます。楠木正成に由来する作品が3点も出品されます。多くの優れた作例が残るのは楠木正成に忠誠の理想を見た近代の必然でしょう。菊池契月《小楠公弟兄》の、澄み切った少年の瞳に憤死の最後がよぎります。

第III章「市井の人々」では、洋画の優品も見ごたえ十分です。小磯良平《着物の女》は、作者にとって「最も脂の乗り切った」昭和初期の作品です。端然とした印象の小磯作品の中では、女性の色香が漂うもので

す。庄巻は朝倉文夫《墓守》です。実在の墓守老人を徹底して観察。あるがままの老人の姿を出現させています。小倉遊亀後半の画業を代表する《舞妓》も是非ご覧下さい。

最終章「親しき人をみつめる眼」でも名品が皆様をお待ちしています。生活に根差したりアリズムを追求した梶原緋佐子《姉妹》、対照的に少女の純真を気品高く謳った小倉遊亀《姉妹》。そして三岸好太郎《少年道化》など。

帰り道、思いがけない傑作たちとの出会いで、幸福感に包まれること請け合いです。

◆5月の関連行事

みどころガイド
日時…毎週日曜日 13時30分~14時
会場…美術館講義室

子どもツアー(小・中学生対象)
5月2日(日) 10時30分~11時
参加無料(保護者の方は2人目から要観覧料)

宮本三郎 《SALOME (女シリーズ1)》
1973年 東京国立近代美術館蔵

小磯良平 《着物の女》
1936年 神戸市立小磯記念美術館蔵

菊池契月 《小楠公弟兄》
1943年 京都市美術館蔵

朝倉文夫 《墓守》
1910年 東京国立近代美術館蔵

雪舟の《花鳥図屏風》と加賀藩の美術工芸

4月18日(日)～5月23日(日) 会期中無休

学芸員の眼

3月末、昨年借用した作品の返却に、前田育徳会へ行きました。前田育徳会に隣接する駒場公園の桜は既に五分咲きで、子どもたちの姿が見えます。駒場公園一帯は、かつて東京帝国大学の駒場農学校にあった場所で、前田家はいわゆる赤門の建つ本郷邸と土地交換することで、昭和初期に本郷から駒場へ移転したのです。

前田育徳会、通称「尊經閣文庫」の建物は非公開ですが、駒場公園内の旧前田家本邸(洋館)と本邸和館は公開されています。外国からの客人を迎える和館には、37畳以上の御客間と御次之間があります。ここには本郷邸で使用した橋本雅邦の襖絵がそのまま用いられました。雅邦の襖絵は来年の2月に展示予定ですが、駒場公園の本邸和館を訪れると、当時の姿により思いを馳せることができます。



旧前田家本邸(洋館)

橋本雅邦《四季山水図襖》

※2022年2月25日～3月24日展示予定

前号の美術館だよりでは、雪舟の《花鳥図屏風》を紹介しましたが、今回の特集では、雪舟に影響を受けた狩野派の絵画も公開します。今号では、久しぶりの公開となる狩野探幽(一六〇二～七四)による2つの作品を紹介します。

ひとつ目は、右幅に龍、左幅に虎を描いた一幅対の大きな掛軸です。東西南北の四方を守る神のうち、東を青龍が、西を白虎が守ることから、龍虎はしばしば対で描かれました。龍は雲間から頭部のみを出し鋭い眼光を見せ、虎は竹林から飛び出してきたような躍動感に満ちています。両幅に「探幽齋書之」と「法眼探幽」の落款と印があり、寛永13年(一六三六)から寛文2年(一六六二)の間に描かれた作品とわかります。

ふたつ目は、中国の前漢時代の高祖の功臣として

武功を成した三傑こと、韓信・蕭何・張良の3名に、後漢時代の武将鄧禹と後漢の三国蜀漢時代の名宰相である諸葛亮(孔明)の2名を加えた「漢五傑」を描いた《漢五傑像》です。探幽と三男探信・四男探雪による合作で、探幽が蕭何を、探信が張良と鄧禹を、探雪が韓信と諸葛亮を描いています。諸葛亮は葛巾をかぶり、羽扇を持った姿で描かれており、中国の典籍に描かれた姿を参照しながら、坐像として描かれたことがわかります。それぞれ姿の上には、朱舜水・人見竹洞・木下順庵という同時代の儒学者の賛文が記されていることも特徴です。

第2展示室にて開催中の「加賀藩における狩野派の絵師たち」とあわせてご鑑賞ください。

《龍虎図》狩野探幽

工芸と暮らす

4月18日(日)~5月23日(日) 会期中無休

前回の美術館だよりでは、工芸の3つの分類と富本憲吉の芸術的なやきものの量産化について簡単に紹介しました。

今回はそれをふまえ「鑑賞を主とする工芸」と「用途に即した工芸」について、みてみましょう。

「鑑賞を主とする工芸」は端的に述べれば、使うもののかたち(皿、箱、碗など)をした作家の自己表現といえるでしょう。例えば、高権成《鉄釉千筋鉢》は、大皿に千筋をつけ、鉄釉をかけたグラデーシオンに独特の味わいがあります。また、二代須田菁華《染付色絵箆に魚図中皿》は、日常使いに丁度よさそうな大きさの皿ですが、高台にひもを通す穴が開けられていて、飾絵皿としてつくられていたことがわかります。これらの作品は食器として使うというより、絵画の

「機織図」と対の画題でした。やがて日本へ入り、16世紀頃から「四季耕作図」のみで描かれるようになったのです。

画題が中国由来であることを裏付けるように、「田山川家本」の人々は中国の風俗で描かれています。季節は左隻から右隻へと流れていて、一般的な日本の屏風絵とは逆です。左隻には田植えに励む人々や休息する人、右隻には稲刈り・脱穀を行う人々の姿が描かれています。しかしながら、水田に水を入れるはずの龍骨車は、水田から水をかき出す構図になっており、しかもその人々の足元にはペダルすらありません。守景は「四季耕作図」を多く描きながらも、農業そのものにはあまり関心はなかったようです。

ようにみて楽しむ皿といえるでしょう。

一方「用途に即した工芸」は、前号の富本憲吉作品や大垣昌訓《蒔絵草花図絵替り椀》、お茶道具を入れる橋本仙雪《竹網代茶箱》など、食べる、しまう、いれるなど具体的な用途がある工芸があげられます。

大垣は一八九二(明治25)年に漆器や漆七宝を制作する「大垣工場」を開設し、職人を雇って椀などをつくりました。大垣は作家であると同時に経営者・デザイナーでもありました。この絵替り椀は加賀蒔絵の技術を駆使しつつ、図案化した様々な植物を配した、芸術性の高い「用途に即した」椀といえます。

きれいな工芸を日常に取り入れた生活を想像しながら、展示をお楽しみください。



大垣昌訓《蒔絵草花図絵替り椀》

加賀藩における狩野派の絵師たち

4月18日(日)~5月23日(日) 会期中無休

「加賀藩における狩野派の絵師」といえば、まず久隅守景が挙げられます。東京国立博物館が所蔵する国宝《夕顔納涼図屏風》が有名ですが、農村における四季の移ろいと稲作に励む人々の様子を描いた《四季耕作図屏風》もよく知られています。しかし、守景の「四季耕作図」にはいくつも種類があることは、あまり知られていません。重要文化財の《四季耕作図屏風》は、今夏の企画展「加賀百万石・文武の誉れ」展で紹介しますので、今号では、現在展示中の重要美術品で石川県指定文化財に指定されている《四季耕作図屏風》、通称「田山川家本」を紹介します。

「四季耕作図」は、元々権力者に人々の労働の様子を知らしめる鑑戒画として中国で描かれたもので、

「機織図」と対の画題でした。やがて日本へ入り、16世紀頃から「四季耕作図」のみで描かれるようになったのです。

画題が中国由来であることを裏付けるように、「田山川家本」の人々は中国の風俗で描かれています。季節は左隻から右隻へと流れていて、一般的な日本の屏風絵とは逆です。左隻には田植えに励む人々や休息する人、右隻には稲刈り・脱穀を行う人々の姿が描かれています。しかしながら、水田に水を入れるはずの龍骨車は、水田から水をかき出す構図になっており、しかもその人々の足元にはペダルすらありません。守景は「四季耕作図」を多く描きながらも、農業そのものにはあまり関心はなかったようです。



重要美術品《四季耕作図》(左隻) 久隅守景

優品選

4月18日(日)~5月23日(日) 会期中無休

5月に入り、春から初夏の陽光に目を細める季節へ移ってきました。

日本画分野では仁志出龍司《萌春の道》でやさしい春の芽吹きを感じ、西出茂弘《木漏れ日》で太陽の恵みを味わってください。また、企画展示室に負けじと美人画もご用意しました。北野恒富《雨後》では、着物の柄にさりげなく季節を感じる工夫があったり、青葉に裏彩色を施してあったりと楽しめます。

油彩分野で展示している作品の中で、海外の風景を描いたものが4点あります。奥田憲三《閑村遅日》、田辺栄次郎《ロッシェ展望》は、石造りの町並みを丁寧な筆致と落ち着いた色彩によって捉え、どっしりとした存在感を示しています。一方、藤本東一良《コンカルノのバルコン》、村田省蔵《午後の町》は、明る

い色彩によって表現され、画面にまばゆい光が満ちているようです。

彫刻分野です。企画展で人物像をたっぶり見たあとは、抽象作品もどうぞ。ステンレスのらせん構造が美しい木戸修《スパイラルリング#3》、凧と女性が組み合わさったような造形の田中太郎《凧》、無機質な造形でありながら見られているような気もする(?)、堀義雄《闇の中の目の闇》などを展示します。

素描分野で展示の脇田和の人体デッサンは、モデルにできるだけ近づき、まず瞳、そして、眼球が眼下に湾曲しているところまで丁寧に描いています。脇田が人体に冷静に立ち向かい、輪郭線をゆっくり引きながら、鋭い眼力と描写力を身につけていった軌跡をご覧ください。



北野恒富《雨後》

いしかわゆかりの肖像

4月18日(日)~5月23日(日) 会期中無休

前号に引き続き、展示作品の一部をご紹介します。

羽根万象は、昭和の空気を醸す美人画を描く日本画家です。《丘の家族》は作者の家族を描いた作品。街を見下ろす高台に建つ家。解放感溢れる屋上でくつろぐ妻とそれを取り巻く娘たち。高度成長期を象徴する豊かさが感じられます。おなじく家族を描いた百々俊雅《転た寝》は、何気ない娘と孫の日常を装飾的に描いています。

油彩分野で展示する、伊東哲、坂寛二、藤井外喜雄の自画像は、大正〜昭和初期に描かれた作品で、その時代の独特の雰囲気をもたらしています。まだ石川の地に、それほど洋画が普及していなかった時代、若き情熱をたたえて油絵の世界へ飛び込んでいった画家たちの熱意が、じっくりと描きこまれた小さな画面

から伝わってくるようです。

宮本三郎は数多くの女性像を描いており、その中でも戦後から描き始めた京舞妓は、宮本芸術の重要なパートです。《舞妓十二題》の作品は、舞妓における磨き抜かれた日本女性の伝統美とともに、その存在が現代の生活とかけ離れたものとなっていく悲哀を後世の世に残したいという想いから描かれました。

彫刻分野からは、坂坦道《赤とんぼ》を紹介します。二人の子どもが肩を寄せ合い上方を見つめています。モデルは作者の子どもたち。二人は蓮の葉の帽子をかぶり、男の子はクモの巣を張って使う虫取り網(能登地方で使われていました)を、女の子は虫かごを手にしています。逃げたトンボを目で追っているのでしょうか、情景への想像がふくらみます。



宮本三郎《舞妓十二題 おこしらえ》

令和3年度の土曜講座を開講します

5月から本年度の土曜講座を開講します。当館学芸員が日ごろ研究しているテーマや、開催中の展覧会に関連したテーマで行います。お気軽にご参加ください。

毎回午後1時30分より3時まで。事前申し込み不要、聴講無料です。

今年度後半の講座については、改めてお知らせします。

※新型コロナウイルス感染症の影響で日時などを変更、または中止する場合がございます。

No.	月/日	テ ー マ	担 当
1	5月15日	歴史画と近代	前多 武志
2	5月22日	近代日本の野外彫刻	竹内 唯
3	5月29日	仏像は語る3	谷口 出
4	6月12日	前田家歴代藩主の甲冑・陣羽織と加賀象嵌鎧	村上 尚子
5	6月26日	コレクション展(近現代工芸) スライドトーク	西 ゆう子
6	7月17日	加賀藩主・前田家の文武二道観	村瀬 博春
7	7月24日	仏像は語る4	谷口 出
8	7月31日	加賀における高山右近とキリシタンの記憶	村瀬 博春
9	10月9日	大樋陶冶斎と古陶	奈良 竜一
10	10月16日	版画の技法	深山 千尋

ご参加にあたっての注意事項

- ① 来館時にサーマルカメラによる体温チェックを行います。
体温が37度5分を超える方の参加はご遠慮ください。
- ② マスクの着用、手指消毒の徹底をお願いいたします。
- ③ 参加時は受付名簿に氏名と連絡先をご記載ください。
- ④ 密集を避けるため、前後両隣の席を空けての着席をお願いいたします。
- ⑤ ホール内では会話を極力ご遠慮ください。

新コーナー

「学芸室の人々」が始まります

石川県立美術館の学芸員にスポットをあてたコーナー「学芸室の人々」を始めます。基本的に展示会場の裏方で活動している学芸員たち（※展示室で座っている看視スタッフとは違います）。学芸員という職業の話をする、といったどんな人たちなのか想像がつかない、と言われることもよくあります。このコーナーでは、その一端がちよつとのぞける…かもしれません。1年間かけて1人ずつ紹介していきますので、お楽しみに。

谷口出（副館長）

副館長の谷口出です。学芸部門をとりまとめています。

石川県立美術館の名で当地に開館した昭和58年から勤務して今年39年目を迎えました。

「誰に対してもわかりやすく話をする」ということを心掛けています。長く勤めていると、知らず知らずのうちに専門的なことばを使います。自分の考えを押し通してしまいがちになります。話す時と場所、相手にあわせて、最もわかりやすいことばで話をする。それがいかに大切かと嶋崎丞前館長の立ち居振る舞いから教わりました。しかしまだまだ嶋崎さんの域からは遠く、自分の至らなさを痛感しています。

5月の行事予定

■企画展「かおすがた・ところ―肖像と近代―」関連行事	
「みどころガイド」 毎週日曜日(2日、9日、16日、23日)	
13時30分～14時 美術館講義室 無料	
企画展担当学芸員がスライドを用いて、作品やみどころを紹介いたします。	
「子どもツアー」 2日(日)	
10時30分～11時 参加無料(保護者は2人目から要観覧料) 小・中学生対象 子ども用の鑑賞パンフレットをもらって、学芸員と一緒に展示を楽しもう。	
■土曜講座	
15日(土)	「歴史画と近代」 学芸第一課課長 前多武志
22日(土)	「近代日本の野外彫刻」 学芸主任 竹内唯
29日(土)	「仏像は語る3」 副館長 谷口出
■映像ギャラリー	
9日(日)	「世界・美の旅1 ルノワール ～世紀末の女たち～」 (30分) 「世界・美の旅16 フェルメール ～静寂のフェルメール～」 (30分)
16日(日)	「悠久の中国 やきもの紀行 6 用の美を極める 宜興(ぎこう)窯」 (31分) 「日本美術史 室町桃山時代 水墨画・庭園・城・障壁画」 (24分)
14時半～15時半	美術館ホール 無料

今年度の目玉

—令和3年度の石川県立美術館にご注目ください！



令和3年度が始まりました。今年の展覧会を紹介します。

昨年はコロナ禍により、全国で展覧会が中止となったり、開催時期が変わったりする美術館が相次ぎました。当館でも「没後35年 鴨居玲展」が開催されただけで、春・夏・秋に予定していた3つの展覧会はいずれも1年延期となりました。

これらの企画は、満を持しての開催となり、内容を拡充して実施します。

春の「かお・すがた・こころ」展は、サブタイトルを「肖像と近代」とし、当初予定の「いしかわゆかりの肖像」から日本の近代を代表する肖像画や彫刻を集めた展覧会としました。ポスターには「大観先生ご来館」、チラシには「乳飲み子から墓守まで 近代の名品ご来館」と示してあります。安田靉彦や平櫛田中、朝倉文夫と

いった作家の名品が並びます。

毎年おたずねの多い

国宝「剣銘吉光」(白山比咩神社蔵)は、

今年度前田家との関わりから夏の「加賀百万石 文武の誉れ」と秋恒例の「石川の文化財」の2回出品することになりました。石川県に所在する2件の国宝をご覧いただく絶好のチャンスです。

また、「加賀百万石 文武の誉れ」展では、前田家から皇室に献納された《古筆短冊手鑑》が公開されます。天皇のほか公家や武家の手になる和歌・漢詩などを収めた短冊を集めたもので、徳川家康・豊臣秀吉の筆跡が含まれる貴重な資料です。

秋は、国際北陸工芸サミットの開催に併せ、工芸一色

となります。

海外から「ブダペスト国立工芸美術館 名品展」、前田家の「百工比照」、現代作家として「大樋陶治斎の世界」、最後に北陸三県の芸術院会員・人間国宝の作品を集めた「うるはしきものめでたきわざ」。ちよつと立ち寄って楽しい一時を過ぎます。そんな美術館をめざす今年一年です。

次回の展覧会

令和3年5月29日(土)
～7月4日(日)
会期中無休

	前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
	前田家歴代藩主の 甲冑・陣羽織と 加賀象嵌鏡 I	琳派コレクション I —宗達・宗雪・光琳・乾山—
第3展示室	第5展示室	第4・6展示室
光の印象・光の表現 【近現代絵画・彫刻】	初夏の優品選 —夏が来る— 【近現代工芸】	優品選 【近現代絵画・彫刻】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
5月3日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

5月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00 年中無休

5月の休館日は
24日(月)～27日(木)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせは ☎092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第451号(毎月発行)
2021年5月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishiki.pref.ishikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。